哲學研究　第二百三十八號　第二十一卷　第一册

感情の煩惱的性格

佐藤幸治

一、緒言

感情を具體的人間に於ける事象と見るとき要素分析をことごとした從來の心理學に於いては顧みられなかつた種々の性格の如きも問題とされてくる。今こゝに考察せんとする感情の煩惱的性格の如きも一時は排棄されもしたものであるが嘗ては感情研究の主要部を占めたものであり、現在と雖も人間生活との關係に於いて之を見るとき一つの否定し得ぬ事實として我々に迫り來るものである。煩惱といふときその語は元來佛教に出づるものであつて其の廣大なる哲學體系を背景として之に關する論説も決して少くはなくこれのみの闡明を以つて優に一大研究をなすに足るものであるが、併し私の目下意圖するところは寧ろ佛教の煩惱論の含む一二の契機をとつて之を歐洲の哲學の流れを汲む現代の心理學に於いて如何に生かし得るかを考究することである。この兩者を媒介するものは

人間生活の心理學的事實である。煩惱の持つ契機として先づ私は身心惑亂と煩惱卽菩提との二つをとるが、此のほか煩惱地法と共に善地法をも認めるその立場(一)の如きも顧慮せらるべきであらう。かくて次の考察に於いては第一に歐洲の哲學に於いて煩惱にかなりの程度に於いて相應すると考へられるパッション(二) passion 概念の變遷を辿り、其處に右の諸契機が如何に認められるかを顧み、更に之に關する心理學的事實を種々の方面より省察してこれらの諸契機の持つ心理學的意味を究明したいと思ふ。

註（一）橋惠勝「佛教心理の研究」第六章心所有法。
（二）passion については「感情」「激情」「情念」等の諸譯があるが、次に述べるが如く多くの意味を有しその間に更に變遷を見るものである故特に譯語を用ゐずにおく。

二、パッション概念の變遷

パッションの思想はギリシャ時代に於いて既にストアのアパテイアなどに認められるが其の心理學的考察の著しい發展を示したのはデカルト、スピノザに於いてである。(一)

デカルトによれば(二)アクション action とパッションとは相對概念であつて一つの作用も之を生ずるものについて云へばアクションであり、それが加へられるものについて云へばパッションである。心についてアクションと呼ばれるものは心自身によつて發動される意志に當り、パッションとは心以外のものによりひき起される各種の知覺に相當するものである。此の知覺には音、光の如き外物

に關するものと、痛又は熱の如き身體に關するものと、喜び、怒りの如き心そのものに關するものとがある。此の第三のものが「心のパッション」passions de l'âme と呼ばれるものであつて、それが心に關係し而かも心自身によつて生ぜられる「心のエモション」émotions de l'âme とも稱し得る意志とは區別してパッションと見做されるのは身體の一作用である動物精氣 esprits animaux の運動によつて起され、保たれ、强められるものであるからである。この動物精氣が心に働きかける局所は腦髓の中央にある松果腺であつて、普通心の高い理性的な部分とその低い感性的な部分、或ひは意志と自然的欲求との間に生ずるやうに考へられる葛藤は、心がその意志により、身體がその動物精氣によつて同時にこの松果腺内に起さうとする運動の相反するために生ずるものに外ならない。心は單一であつてその内部に爭鬪はあり得ず之に對するものは身體あるのみである。腺内に動物精氣の惹起する運動には單純な外物の知覺の基礎となるが如きものと心のパッションの基礎となるが如きものとがあるが意志との間に爭ひを生ずるのは勿論後者である。是の如きパッションとしてデカルトは驚異 admiration、愛 amour、憎 haine、欲望 désir、喜び joie、悲み tristesse の六つの根源的感情と之より派生する多くの感情とを擧げるのである。かくてデカルトの心のパッションは現代の心理學に於ける感情の概念と略々一致するものである。只心の能動性を含蓄するティチナーの情操 sentiment(三)の範圍が之より除外される。併しデカルトもパッションとしての感情のほかに幾分之に對應す

る心そのものにより心の内に喚起される「心の内面的なエモシヨン」émotions intérieures de l'âme を認めてゐる。それは我々が物語を讀み、演劇を見るとき一方心に喜び、悲み或ひは愛、憎を感じながら、それと共に此等の諸々のパッションが心に喚起されるのを感ずることについての快感を持つ場合の如きであつて、これらの内面的なエモシヨンの特色はその内容となるパッションに對し獨立せる位置を持ち得ることである。即ちシェーレル(四)などの感情層説に於ける深い感情に相當するものであらう。かくてパッションに對する無上の療法として德の修錬が推賞される。我々の心が自らの内に自ら滿足すべきものを有するならば他から來る凡ての煩ひも少しも心を傷けることが出來ず、德による心の平靜を保つならばパッションの如何に激しい力であつても之を攪すべくもないからである。デカルトのパッションの廣汎な意味に從つてその中には勿論善きものと惡しきものとが含まれてくるが更にその説の特色をなすものは感情に對する根本的な寛大な態度である。「感情は凡て本性上善良なものであつて只その惡用或ひはその過度を避けさへすればよい」と云ふその書の終に近く述べてゐる言葉は何よりもよくその態度を表明してゐる。かくて怒りの如きも過度に陷らないやうに細心の注意を要することを説きつゝ他方に於いて危害を排除する上に勢をつける點で有益であることをも認めるのであり、羨望、卑怯などについても或る意味での效用を附言することを忘れてゐない。第百三十七・八項に説いたパッションの效用、並びに缺陷の如きデカルトの感情に對する見

方の素直さと之より來るその正當さとを極めてよく示すものである。氏によればこれらのパッションの自然的效用は心を鼓舞して、身體を保存する或ひは一層完全にする役目を持つ活動に共鳴させ之に貢献せしめることである。卽ち身體に有害なものの認知は苦痛を伴ひ、之よりそれに對する憎み、ひいてはそれから免れんとする欲望をひき起し、身體に有益なものは一種の快感を與へて之に喜び、愛、ひいては之を求め保たんとする欲望をも生ぜしめるのであつて、各種のパッションは何れも夫々の效用を持つものである。併しその他面缺陷もないではない。身體に有害なものでありながら最初は快を與へ、有益なものでありながら最初は不快の感を喚起する場合があり、且これらのパッションは善惡いづれについても之を實際よりもはるかに重大に見せるのが普通である。動物はかゝるパッションに導かれるが故に小さい禍ひを避けようとして却つて大きな禍ひに陷ることがあるのである。かくて「智慧が主として有用であるのはそれがパッションを支配し之を巧みに操縱することを敎へてパッションの害惡を十分に堪へ得る程のものとなし或ひは凡てのパッションから喜びを得るやうにさへするその點にある」のである。「人生の禍福は專らパッションによる、」「感情のため最も動かされ得る人々はまた人生の醍醐味を最も多く味ひ得る人々である」と述べるところにもデカルトのパッション論の面目は躍如とするであらう。デカルトに於いては卽ち理性と感情とがそれ程分裂、對立することがなかつた。最初から兩者は和解されてゐたと見ることが出來る。之に伴つ

て煩惱卽菩提の問題の如きも起る必要がなかつたと云ふことが出來るであらう。

スピノザ(五)によれば感情 affectus とは身體の活動力を增加し或ひは減小し、促進し或ひは抑止する身體の變化及び之と同時にその變化の觀念を意味するものであつて、我々がこれらの變化の妥當なる原因であるときはその感情はアクチオ actio、然らざるときはパッシオ passio と呼ばれるのである。かくてパッシオの意味はデカルトに於ける場合よりも相當狹められてゐる。併しその擧げてゐる欲望 cupiditas、快 laetitia、不快 tristitia 以下の感情の大部分はパッシオであると云つてよい。アクチオとして特に擧げられてゐるのは第一に節操 animositas と度量 generositas とに分たれる剛毅 fortitudo である。節操とは人がその生存を理性の命令のみに從つて維持しようとする欲望であつて節食、節酒、危難の際の沈着などを含むものである。度量とは人が理性の命令のみに從つて他の人々を援助し又彼等と交際しようと努める欲望であつて謙讓、溫和などを包括するものである。第二に我々が理性的生活を營むことによつて我々の中に生ずる善をなさんとする欲望、卽ち義務心 pietas、理性的生活を營む人が他人と友情を結ばんとする欲望、卽ち敬意 honestas なども之に加へられるであらう。他の感情は殆ど凡てパッシオであると見て差支へはないやうである。此等の感情は云ふまでもなく理性の命令のみに從ふものでないためにアクチオではないのであるが、併し之に全く背反するもののみでもなく、其の間種々の度合のものが存在するのである。「我々のアクチオ、卽ち人間の力

或ひは理性によつて説明される欲望は常に善である、之に反して他の欲望は善でも悪でもあることが出來る」と云ふことも右を裏書する。かくてエチカの第四部に於いては如何なる感情が人間理性の法則と合致し、如何なるものが之に反對するかが示される。例へばスピノザによれば一方常に善である愉快 hilaritas の如きものと共に他方不愉快 melancholia、憎 odium、過衰 existimatio、過貶 despectus の如き常に悪であるものもあり、更に場合により善となり悪となるものもあるのである。「快はそれ自身に於いて悪ではなくて善である、之に反し不快はそれ自身に於いては悪である。」「快樂 titillatio は過度であつて悪であることが出來る。之に反して苦痛 dolor は快樂或ひは快が悪である限りに於いて善であることが出來る。」「自己滿足 acquiescentia in seipso は理性から生ずることが出來る、」かゝる「滿足は實に我々が希望し得る最高のものである、」併し群集の意見に由つてのみ養はれる虚名の如き滿足も存在する。スピノザもかくの如く同一の感情も種々の關聯に於いて善となり悪となることを認めるのである。またデカルトの注意せる如き感情の二重性にも觸れないわけではない。「快の多くは身體の一部分にのみ關係するが故に我々は通常全體としての健康を顧慮せずして我々の生存を維持しようとする。更に欲望も最も多く我々を支配するものは現在のみを顧慮して未來を顧應しない」ものであるためにパッシオなる感情から生ずる欲望が盲目的であると呼ばれるのである。これと共にスピノザの單なる苦行讃美者でないことは「不快を生ずるものを善、快を

生ずるものを惡と主張する」ものを迷信として斥けてゐることでも明白である。併し全體として見ればパッシオの領域がデカルトに於けるものより一段限定せられると共にデカルトの感情に對する寛大な態度が幾分失はれ、理性と感情との對立が表面に出て來てゐることを否定することは出來ない。而して之を和解せしめるものは、「パッシオなる感情は我々がそれに就いて明晰判明なる觀念を形成するや否やパッシオたることを止める、」卽ち「感情は我々がそれを一層よく知るに從つて益々我々の支配の下に入り、心のそれから働きを受けることが愈々少くなる、」「心は總てのものを必然として認識する限り感情に對して一層大なる力を有し、或はそれから働きを受けることがそれだけ少い」とする思想、神の知的愛の思想、更に「福祉 beatitudo は德の報ではなく德それ自身である、又我々は快樂を制するが故に福祉を樂むのではなく、反對に我々はこれを樂むが故に快樂を制することが出來る」となす思想であらう。そこには外部より强ひられた道德の苦悶ではなく、內面的な宗敎的態度より生れた安らかさがある。

カント(六)に到ればライデンシャフト Leidenschaft 卽ち心のパッシオ passio animi の惡性は更に重視されてくる。氏は「快・不快の感情」Gefühl der Lust und Unlust とは項を改め、「欲求力」Begehrungsvermögen のうちにアフェクト Affekt とライデンシャフトとを說いてゐる。カントによれば「此の兩者は理性の支配を排除するが故に之に屈從することは常に心情の病ひである。」併し此の二つは

本質的に異るものであつてその豫防に於いても治療に於いても兩者への對策は根本的に變へなければならぬものである。アフェクトは堰を破つた奔流の如く急激に人に迫つて考慮の餘地を與へないことを特色とする。それは一時的の酩酊の如く頭痛を殘すとしてもなほ比較的容易に醒ますことが出來る。之に對しライデンシャフトはその床を次第に深く刻んで行く河流の如く人の理性を以つても容易に制し得ず寧ろ之を侵略せんとさへする欲向 Neigung——(七)習慣的な感性的欲求——である。それは慢性の中毒にも、たゞ益々妄想を逞くする狂氣にも譬ふべきものである。アフェクトは正直であるが、ライデンシャフトは陰險である。アフェクトは自由及び自律の一時的な喪失であるが、ライデンシャフトはそれらの放棄であり奴隷根性に對する滿足である。かくてライデンシャフトはアフェクトの如く多くの邪惡をも胎む不都合な感情であるのみでなく例外なしに惡であり、純粹實踐理性に對する癌とも呼ぶべきものである。スピノザにあつてはパッシオの中にも善なるものがあつたが、カントに於いてはかくの如く更に一段の限定を受けて根本的に惡性のものとなされるに到つた。此の他面アフェクトの中には喜び、悲み、驚愕 Schreck、怒り、恐れなどの外に理性より生ずるものが擧げられてゐる。卽ち思慮を以つて危險にのぞみ敢て怯ぢないのは「勇氣」Mut であるがこれは氣質的性質にすぎない大膽 Herzhaftigkeit の如きものとは異り原則に基くものであつて、一つの德なのである。他人の惡辣な嘲笑に會つても泰然として義務の命ずるところに邁進するものは道德的

勇氣であるが、一方感性に屬するアフェクトとしての勇氣であつても理性によつて喚び起され眞の「剛毅」Tapferkeit と見らるべきものもあるとカントは說く。更に「驚異」Erstaunen の如きも理性によつてのみ惹き起されるアフェクトである。かゝるアフェクトについては或る程度まで「感性に對する辯明」の如きものも適用し得るであらう。氏は其處に於いて通常感性の罪に歸せられる三つの事態を擧げながらそれは結局悟性の責任であることを逐一辯明し、「人間の內面的完成は自己の凡ての能力を自己の自由になるやうに自己の力の內におくところにある。之には感性をも弱めることなしに悟性を支配せしめるやうに努めねばならない、感性なくしては悟性によつて加工せらるべき質料を缺くことになるから」と述べてゐるのである。併しこれもライデンシャフトには妥當し得ない。「種々の欲向は自然的な動物的な欲求として生物體（人間であつても）に缺くべからざるものであることを認めることが出來るであらう。併しそれがライデンシャフトになることは神樣も望まれたわけではない。」慈惠 Wohltätigkeit の如き元來良性の欲求であつてもライデンシャフトになれば實際的に有害であるのみでなく道德的にも拒斥すべきものとなる。カントによれば「人生の大洋を思ひ思ひに渡るとき理性は磁石、パッションこそは風」などとうたふことは詩人にはいゝとしても哲學者にはかりそめにも許されることではない。カントのライデンシャフトは自由、性などの欲向、名譽、支配、所有などの病的欲求（ズウフト）Sucht などの如き多樣なものを含むとしても凡て惡である。更にカント

のライデンシャフト論の特色をなす點はそれと理性との相反の重視と關聯して單なる動物にも、純粹の理性的存在にもライデンシャフトは存在し得ないとなしてゐる點である。卽ち動物に於いては性的欲求の如きは極めて激しくあつても之と衝突すべき理性を缺くが故にライデンシャフトとは呼ばれないのである。かくの如くカントに於いては對立的契機が極めて顯著であると共に和解的契機が著しく稀薄であつてデカルトなどとは好箇の對照をなしてゐる。個性によつてはかゝる對立そのものの中に安住し得るものもあるかも知れぬが、併し一般人の具體的心性にとつては德についての常に意識的であり自覺的であらねばならぬ、などの要請と共にこれは相當疎遠なものであらうと思はれる。

以上の如くパッションの觀念はデカルトよりカントに到り次第に限定されると共にその煩惱的性格をも明瞭にして來たと云ふことが出來るが、此の概念が現代の心理學に傳へられたのはかゝる倫理的評價を含む點ではなくカントに於いて現れた他の點を中心としてである。カント以後リボーに到るまでパッションを心理學の問題とした人は少い。ヘフディング(八)の心理學にカントの說を紹介してゐるものなどその少いものの一つである。中にはかゝる見方を排した人もあつた。ヴント(九)の如きはこれである。氏はスピノザの情緒說を目して情緒に對する論理的反省を以つて情緒の學說或ひは記述そのものとなす主知主義的見解の代表的なものとなし、カントに於いて發展されたアフェクト

とライデンシャフトとの區別の如きも倫理的見地から影響されたものであり實際上の役にしか立たぬものとして性格學か倫理學の領域に屬すべきものであるか、或ひは情緒の强度及び經過形式に關するものであるかであると評し、心理學的にはライデンシャフトはアフェクトから特に區別すべき領域ではないと論じてゐる。かくてヴントの情緒說は感情要素、經過形式などの生きた情緒の面目といふよりもその質料、輪廓とも云ふべきものを主なる問題とするに到つたのである。

ヴント等に對して感情の諸種の事態を考へ、カントの用ゐた概念をある意味で再興しようとしたのがリボー(一〇)である。リボーの感情心理學はヴントの立場などに對して寧ろデカルトなどの流れを汲む點もあり、生物學的、病理學的立場から主として研究を進めんとするものである以上、感情に關する具體的な問題を數多く捉へることの出來たのも敢て不思議ではない。リボーは大小、激穩、一時的永續的、單純複雜などの諸種の感情狀態をも、更に恐れ、怒り、悲みなどの如き特殊の性質を持つた現象をもエモシヨンなる一語を以つて表現することの不都合を思ひ、カントの凡てのパッシヨンは病ひであるなどの價値判斷的な面は之を棄てながら現代心理學の方法並びに結果を用ゐて此の概念を生かさうとするのである。氏は感情生活 vie sentimentale の現れを三つの群に分ける。狹義の感情狀態 sentiments ou états affectifs proprement dits とエモシヨンとパッシヨンとである。第一のものは食慾そのほかの欲望、感官の活動、社會的、美的、學的、宗教的諸活動などに結合する

快・不快の感情であり、第二のエモシヨンは一つのショック、平衡の破壞を以つて始まることを特徵とする、本能的なものの急激な反應であつて、運動或ひは運動の抑止を主として含むものであり、之に對し第三のパッシヨンは一つの觀念が强く持續的に支配してゐることを特色とするものである。一言にして云へば「パッシヨンは持續的な知的となつたエモシヨンである」la passion est une émotion prolongée et intellectualisée. 併しエモシヨンとパッシヨンとは同一の根源を持つとしても、カントの云ふ如く反對のものである。エモシヨンの多いところにはパッシヨンは少い。エモシヨンは生地のままのもので我々の生活體の直接の結果であるが、パッシヨンは我々の本能や傾向に加へられた思考、反省等の產物であつて半ば自然的であり、半ば人爲的なものである。エモシヨンは急性であるとすればパッシヨンは慢性であるとも云へよう。慢性疾患の經過の間に時々急性の發作が見られるやうに、パッシヨンの持續の間には往々エモシヨンの爆發も生ずるものである。かゝる兩者の區別と共にそれらの性格的となつたもの、卽ちエモチフ＝衝動的なもの les émotifs-impulsifs とパッシヨン的なもの les passionnés とが——更に感傷的なもの les sentimentaux が狹義の感情狀態に應じて——區別されねばならない。リボーはなほパッシヨンの原因を論じ、之を構成する作用を說いてゐるがその中感情の煩惱的性格の考察に當り參考となるものは論理的活動とパッシヨンとの交涉である。かゝる關係としてリボーは三つを擧げてゐる。第一は價値判斷 jugement de valeur である。卽ちパッシ

ヨンはその目的にかなふものを肯定し、然らざるものを否定する。感情は先づ結論を斷定し、(一二)これよりその論理を發展せしめるものである。第二は構成的推論 raisonnement constructif と呼ぶべきものである。卽ちバッションがその目的を達成するために種々畫策する場合などの論理的作用の加入を意味する。リボーがバッション的な人々に打算家 les réfléchis ou calculateurs と激情家 les violents とを分けるのは此の推論の優越するか否かによつてである。第三は理窟づけの推論 raisonnement de justification である。バッションはその目的、その行動を正當なものとして基礎づけようとして種々の推論を用ゐるものである。此等三つの交渉の樣式は兩者が同じ方向を持つ場合であつて、バッションと理性との對立はリボーに於いては之と意志との間の葛藤として問題とされてゐる。バッションと云ふ言葉から之を受動狀態と卽斷しようとする一般の考に對して氏はそれは寧ろ反對に我々の活動性の最も明白な形の一つであることを高調してゐる。かくてリボーの擧げるバッションには個體保存に關する貪食、貪飲、種族保存に關する愛、力への意志に關する野心、冒險心、貪欲等の本能的なものから、更に藝術、宗敎、政治、道德等の文化現象に關するもの、そのほか蒐集狂などの小バッション petites passions と呼ばれるものなどが含まれて來る。此等のうち特に興味深いものは文化活動と結合せるものである。かゝるものに關した感情としては通常ティチナー等の意味に於ける情操が考へられる。リボーも一面かゝる普通の道德的感情 sentiment moral、宗敎的感

情 sentiment religieux の如きものをも認めつゝ他方に於いて夫々のパッションを說くのである。例へば宗敎的なパッションとしては神祕主義、禁欲主義、宣敎、迫害などのパッションが擧げられる。道德的なパッションとしても自己の善と信ずるところを廣く世間に宣布して之に世人を從はせようとする使徒的なものもあれば、一つの社會事業のために一生を犧牲にしても止まない事業家的なものもある。前者の形などに於いては道德的パッションが征服のパッションと交錯してそのパッションたる性格を暴露することも少くないのである。その他に於いてもパッションは偏執的となり、狂的となり、病的となることが少くないが併しその限界を定めることは困難である。先の哲學者達とは異りリボーの立場は事實の記述を主とするものであるが故にパッションについてもその善惡を論ずることは少いが、併し之を直ちに惡と見るものではないことは氏がパッションの天才は知の天才に劣らず稀であることを注意し、一方それが犯罪の如きにも導くと共に他方社會のための一大事業の如きをも生み出すことを說いてゐることによつても明かであらう。カントは理性との對立からライデンシャフトが動物と神との間にある人間に於いて始めて見られることを論じたが、リボーはパッションをエモションよりも一段高い組織されたものと見ることによつて兒童や未開人などにはこれが乏しいことを述べ、個性的色彩の濃厚なこと、社會狀態、歷史の時代などにより相違することをも之から導き出さうとしてゐる。

リボーの後デュガなども之に從つてパッションについて述べてゐるが、そのほかティチナー(一二)も此の言葉を特に使用して一方情緒の强度の大なるものと、他方ある持續的な興味、特殊的な持續的な强い情緒的反應樣式との二重の意味を與へてゐる。後者は成功とか學問とか賭博とかに對しパッションを持つと云ふが如き場合である。(一三)

以上を概觀するにパッションは最初受動的精神狀態一般を意味したがその中にても感情的なものが特に重視され、人間に於ける理性と感性との對立に伴ひ感情の煩惱的性格の如きも注意されて來、これがカントに於ける第二の契機卽ち持續的感情的態度の意味の出現を轉機としてその後は此の方に重點が移り、結局英國に於いて慣用されてゐるセンチメント sentiment の概念(一四)と殆ど合致するものとなつたのである。之に伴つて感情の理性との對立、その煩惱的性格なども著しく稀薄となつて來てゐる。煩惱卽菩提の契機の如きはスピノザの宗敎的な見方の中に幾分之を認め得るほか、デカルトに於いては最初より感情に對する態度が和解的であるためにこれが著明とならず、カントに於いては理性と感性との對立が高調せられながら特に和解をさほど重視せぬ嚴肅主義の立場にあるためまたかゝる轉回を見ないで了つた。更にその後の科學的心理學の立場に於いてはデカルト的な根本的な和解の傾向が更に顯著となつたのみである。

註(一)　これより先トマス・アクィナス等にもパッション論があるとのことであるが今回は檢索の機を得なかつた。

（二）Descartes, R., Les passions de l'âme (Traité des passions. 1928. L'Intelligence 版中のもの)なほ右に對する三宅茂譯「感情論」(世界大思想全集第一卷)、並びに朝永三十郎「デカート」を參照した。

（三）Titchener, E. B., A Text-book of Psychology. 1926, 498 ff.

（四）Scheler, M., Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik. 3. Aufl. 1927, 340 ff.

（五）Ethic of Benedict de Spinoza, transl. by W. H. White & A. H. Stirling. (1910, Oxford 版) このほか小尾範治譯「スピノーザ哲學體系」(岩波文庫版)を參照した。

（六）Kant, I., Anthropologie in pragmatischer Hinsicht. (1912, Philos. Bibliothek 版)

（七）藤井種太郎「カントに於ける欲向の驅逐を論ず」(精神科學第四卷七七—一三〇昭和四年)の譯語による。

（八）Höffding, H., Outlines of Psychology. (Transl. by M. E. Lowndes, 1891), 282 ff.

（九）Wundt, W., Grundriss der Psychology. 15 Aufl., 1922, 210.

（一〇）Ribot, T., Essai sur les passions. 5. éd. 1923.

（一一）知的な論理に於いても心理作用として見るとき結論が先に現れる。併しこの場合には結論に對する斷定ではなく疑問である。

（一二）Dugas, L., Les passions. (Traité de psychologie, par G. Dumas. Tome I, 1923, 480—497.)

（一三）Titchener 上揭書 497.

（一四）Shand, A., The Foundations of Character. 1920.

三、事態の分析

第一にデカルトに於いても問題となつた感情の效用並びに缺陷などの二重性を、次に感情の煩惱的性格並びに煩惱卽菩提などの心理學的意義を、現代心理學の事實と學說について顧みその解明を

試みることとする。

（一）感情の持つ二重性

感情、特に情緒の學說に於いてはその效用性或ひは合目的性を重視するものと、その缺陷性或ひは盲目性を中心として眺めようとするものとがある。前者の例としてマクドゥガル、キャノン等を擧げることが出來よう。マクドゥガル(一)は基本的な情緒は本能との關係に於いて始めてよく理解せらるゝとなし、かゝる情緒は「活動狀態にある本能的衝動の表示であり、その身體的表出は此の衝動の性質を我々の同類に示し、彼等の中にも同じ本能的衝動、態度、及び情緒的興奮を喚起するのに役立ち、更にその情緒の質はその興奮の性質とその驅られてゐる行動の種類とをその人自身に告知する役目を持つ。此の最後のものは我々の心的生活に於ける情緒の質の本質的機能と考へてよいものであらう。此等の情緒の質は我々自身の狀態を認識せしめ、我々を動かしてゐる衝動を調整し、指向し、ある程度まで統制することを可能にするのである」と云つてゐる。キャノン(二)は危急のとき副腎の分泌するアドレニンには肝臟に貯藏された炭水化物を糖として血液に供給し、血液を腹部諸器官より心臟、肺、中樞神經系、四肢等に集中し、筋肉の疲勞を速かに恢復し、更に血液を迅速に凝固せしめる等の作用のあることを確め、危急の場合に生ずる苦痛、恐れ、怒り等の經驗に伴ふ身體的變化の合目的なることを論じてゐる。

之に反しジャネー(三)などは情緒の缺陷を重要視する。氏は情緒卽ちエモシヨンの意味を限定して本能的傾向の全く規則的な發動、例へば母親が子供を世話するとか、動物が餌物にとびかゝるとかの場合には用ゐることを止めて、個體が習慣的な行動を以つてしては順應し得ない新しい狀況に於いて不規則的な調子外れの反應をなし種々の機能の障害を來す場合に之を限定しようとするのである。卽ち狀況の新奇、事件發生の急遽、主體の衰弱或ひは沈頓などを條件として現れる環境に對する組織的行動の不完全なることを情緒の本質的なものと見るものであつて、之を疲勞狀態、神經症などと共に心的張力 tension psychologique の低下せる場合の一つとして理解しようとするのである。氏は自ら此の立場を情緒の力學說 théorie dynamique ou energétique de l'émotion と稱してゐるが、相當大きな違ひを持ちながら同樣の名を以つて呼ばれてもよいレヴィン(四)などに於いても情緒は寧ろジャネーに於けると等しくその行動の不完全性を中心として眺められてゐると云へるであらう。

確に情緒は此の二面を持つ。大局的な生物學的展望に於いて見るならばマクドウガル、キャノン等の說くところの如き諸點が看取せられるであらうし、ジャネーなどの所見も情緒發生の場合の事態を詳細に檢討すれば妥當するもののあることを認め得るであらう。かゝる二面性は原始的、本能的なものの特色である。之についてはファーブル(五)の昆蟲記なども興味深い例を與へてゐる。卽ち本能のもの知り science と呼ぶものは本能の合目的性であり、もの知らず ignorance と呼ぶものは

その盲目性であつて、氏は其處に於いてあなばちの如きものが一方規則的な狀況に於いては人間も企て及ばぬほどの巧みさ、賢さを持つた行動を示すと共に、他方或る新奇な狀況に遭遇すればその間抜けさ、融通の利かなさを如何に暴露するかを說くのである。かゝる二面性に對し本能的なもの、原始的なものを統制して誤りなからしめるものは曾ての理性であり、今の心理學の智能である。

情緒がかゝる二重性を持つこと、それが更に高いものによつて規制されることは情緒の生理的基礎殊にその中樞の如きものも裏書する。(六) 情緒に對する中樞としては曾て大腦皮質が考へられたこともあつたが、併し情緒的意識の基礎をなす神經過程は皮質的なものであるとしても情緒的行動を構成する身體的變化が皮質起源のみのものであるとは云へず、寧ろ諸種の事實は强い基本的な情緒の身體的反應が更に低い原始的な部分によつて支配されることを示すのである。このことは怒りなどの反應を構成する行動が一樣であり直接的であり一定の刺戟に應ずるものであり有用であり人類の如き高等な動物に於いても乳兒期の初期から現れるものであることなどを見るならば既にそれが皮質によつて支配される行動の樣式とは顯著な差異を持つことが明かであるが、更に多くの實驗的、臨床的事實が之を立證する。第一に犬、猫などについての除腦の實驗の結果がある。卽ち此等の動物に於いて大腦半球を除去するときは從來の學習の結果と共に新なる學習力をも全く喪失するに拘らず、なほ情緒的反應を留め、殊に些細な刺戟に對しても容易に正常の動物の怒りに酷似した反應

を示すやうになる。此の反應は併し中腦の部分に於いて腦幹を切斷された動物に於いては崩壞し、咬むとか搔くとか尾をふるとかの個々の反射運動を殘すのみとなるのである。かくて情緒的行動の中樞は間腦の部分にあることが推定されるが、バードなどの細密な實驗によればこれは更にその尾半部の腹側部、卽ち恐らく視床下部 hypothalamus に位置するものと考へられる。此の動物實驗に於いて認められる情緒は多く怒りであるが、人間についての臨床的所見などに於いては他の種類の情緒的反應も現れて來る。卽ちエーテル、クロロフォルムなどによる全身麻醉の場合などには意識朦朧狀態につゞいて興奮狀態が見られるが、此の時期には患者は泣きわめいたり、陽氣に笑つたり、腹を立てゝ暴れまはつたりするものである。この後に深い麻醉狀態が來るのであるが、覺醒後にも勿論先の情緒的行動に對する記憶は全然存在しない。かくてこれは意識と關係する皮質過程が第一に禁止された後、間腦の活動が暫く開放されるために起る現象であると想像される。更に神經病理學の方面に於いて顏面筋肉の有意運動は麻痺しながら情緒の表出に於いては妨げられない患者、反對に有意運動は正常でありつゝ情緒的麻痺を示す患者などが發見される。前者は皮質よりの有意運動の經路に傷害のあるものであり、後者は皮質下殊に間腦腹側部などに病變を見る場合である。以上の如き諸事實によつて種々の情緒的反應を支配する箇所は間腦であることが明かになる。キャノン等によつてその效用を認められた內分泌の變化の如きも間腦の機能との間に密接な關係を有する

ものであつて、之と共に間腦の作用の合目的性の如きものも示されると云へるが、他方これは大腦皮質の作用を俟つて始めて十分な統制を得ることが出來るのである。卽ち先に心理學的立場から本能的なものと理性的、智能的なものとの對立を述べたが、神經中樞に於いても之に相當する對立を見ることが出來る。

註（一）McDougall, W., An Outline of Psychology. 4. ed. 1928, 325—326.

（二）Cannon, W. B., Bodily Changes in Pain, Hunger, Fear and Rage. 1915, 184 ff.

（三）Janet, P., La tension psychologique et ses oscillations. (Traité de psychologie, par G. Dumas. Tome 1, 919—952 殊に 944—950)

（四）例へば Lewin, K., Die Entwicklung der experimentellen Willenspsychologie und die Psychotherapie. 1926, 20.

（五）林達夫・山田吉彥譯「ファーブル昆蟲記」Ⅱ一、本能のもの知り、二本能のもの知らず（岩波文庫版）

（六）此の事實は Bard, P., Emotion: I. The Neuro-Humoral Basis of Emotional Reactions. (The Foundations of Experimental Psychology, Ed. by C. Murchison. 1929, 449—487 殊に 469—477) による。

（二）煩惱としての感情

感情に於ける效用性と缺陷性とは直ちにその煩惱的性格を構成しない。昆蟲の本能的行動にも此の二面性があるが特にその兩者が葛藤を生ずるものでもなく只その合目的性に應じてその生存を維持し發展せしめ、その盲目性のためにその生存に不利な行動をとり生命を危くするに過ぎない。衝動的なものの中樞としての間腦に對する統制者としての大腦皮質の存在も直ちに感情の煩惱的性格

を成立せしめるものではない。犬、猫等に於いても情緒的行動の發現は大腦皮質の機制によつて支配されて居り、場合によつては情緒的興奮が優勢となり場合によつては大腦の支配が優位を占めるが如きことがあつても、只それだけであつて兩者の對立が犬、猫などによつて意識され問題とされることは恐らくない。此處に於いて感情によつて煩はされる事態、感情が惡と見做される事態を更に進んで考究せねばならない。

感情によつて煩はされることは感情と之に對する反省とを豫想する。感情が現れても全く素朴的にその中に沒頭してゐる時には煩ひは感ぜられない。この場合反省的に對立するか、素朴的に沒頭するかは諸種の條件に左右されるが、中に於いて個性は最も重きをなすものである。

かゝる個性には第一に發達段階の個性がある。同一個人に於いても衝動と精神との乖離を見、感情の如きものも煩惱的性格を帶びる特殊の時期があるのである。幼少の兒童に於いても神經質的な感受性の鋭い兒童のあることは云ふまでもなく、外界の刺戟によつて甚しく身心を攪亂されると共に之を避けるために外界の刺戟より遠ざからうとし孤獨となるが如き場合もあるであらう。又三四歳の幼兒に於いては意地つぱりが著しく多くなる。シャロッテ・ビューレル(一)なども此の時期を强情期 Trotzperiode と稱して青年期にも比すべき主觀化の時期となしてゐる。此の時代は一次的な自我の誕生期であり、含蓄的であつても自己のプランの出來る時期である。併し此のプラン、豫期の中心

をなすものは衝動であり、習慣であつて青年期に於ける理想の如きものとは著しく相違する。兒童は徒らに自己のプランを主張し、他よりの指圖を徒らに拒否して泣き叫ぶとしてもそれは青年期の煩悶の如き深さと執拗さとを缺いてゐる。かゝる苦悶が對象化され苦にされるが如きことも勿論ないのである。これが青年期に到れば殊に十歳前後の身心雙方の充實せる朗かな外向的態度から次第に內向的となり周圍に對し自己に對する不滿感が一般に燃え上つて來る。之には一方知的作用の發達も寄與することは否めない。ヘルヴィンク(二)などの研究によれば自己の業績に對する素朴的な滿足は十歳頃までに既に顯著な減退を示すものである。青年期に於ける理想の發生と之による自己批判には併し知的なものの外に情意的なものの加入をも認めなければならない。そのうち批判せらるべきものとして又惱ますものとして第一に自己を眺めさす機緣となるものはその衝動生活の發展、殊に性衝動の發現である。青年、殊に兒童期の純眞さを留めながら敎育によつて高い理想を與へられ之に對する熱情を喚び醒まされた青年はかゝる奇怪な抑制し難い衝動に當面して深い困惑と惱みとを抱くに到るのである。之と絡みながら周圍の世界に對する不滿も展開する。此等の理想と衝動との乖離のために一方青年期の一つの特色をなす自殺者の增加が現れるのであり、種々の强迫觀念なども發生するに到るのである。また宗敎によつて此の分裂を和解せんとするものも生ずるであらう。併し通常は成人となり人間を廣く見、世間を知ると共に青年の理想主義は著しく現

實化し分裂が自ら和解されるに到るものである。

併しかゝる感情の煩惱的性格の如きものが顯著となる青年期に於いても幼少より世間の波に揉まれ來つたものの如きにあつては此の分裂も少く、その間に破綻を來すが如きことも稀である。かくの如く發達段階の個性と交叉して個人の個性を第二に考へねばならない。これについて先づ思ひ浮べられるものはクレッチュメル(三)の氣質說である。氏は精神病者の觀察から精神乖離症に近似性をもつ氣質と躁鬱病の傾向をもつ氣質とを分け、此の兩者が夫々特殊の體格との間に密接な關係を持つことを明かにしたのである。卽ち前者は痩身型、鬪士型等と、後者は肥滿型と多く一致すると云ふのである。性格としては躁鬱性のものは世間的、現實的、實際的であり氣分も陽と陰との間を動搖するに對し、乖離性のものは非世間的、理想的、理論的でありその感受性も敏と鈍との兩者を極として動く。世間の人々に對してと同樣衝動性に對しても前者は和解的であるが後者は對立的であり分裂的である。クレッチュメルがその「天才人」(四)に於いて述べてゐるやうに、「或る人々は――私は此處で特に、精神乖離症と正常人との中間狀態にある如き人々を想ひ出すのだが――あらゆる周圍の反對にも關らず殆ど本能的に此の禁慾的な生活理想を追求するに反して、他の例へば輕躁性の肥滿型者の如き人々にあつては、撫育環境が如何に嚴格に禁慾的であつても一向禁慾に對する內心よりの嗜好が湧いて來ないのである。」卽ち感情などが煩惱的性格を帶びるのはかゝる關係に於いて云へば

乖離性氣質の人に多いと云ふことが出來よう。

更にかゝる煩惱的性格を成立せしめる地盤としてリボーも擧げてゐる社會狀態、歷史の時代などをも考慮せねばならぬ。併し此の超個人的なものは感情の惡性を主張する人生觀として之を問題にする方が寧ろ妥當である。卽ちカントなどがライデンシャフトと呼び、佛敎に於いても煩惱と呼ばれるものは必ずしも常に主體の自覺を伴ふものではなかつた。寧ろかゝる自覺なき場合が多いからこそ一層重大視され、惡視されなければならなかつたのである。たとへ個人がその中に滿足して居つてもそれは解脫を妨げるものであり、理性的生活を攪すものであることは變りがない。卽ち此處に問題となるのは個人の經驗ではなく超個人的な人生觀である。その根柢には更に個人の個性の如きも存在するであらう。併しこれには寧ろ民族の如き社會的なものが問題となつて來る。クレッチュメルの說く如き歐洲に於ける北方人種の比較的乖離性的な氣質、アルプス人種の比較的回歸性に傾く氣質なども一般にその民族の人生觀を動かすであらうが、之と共に感情なども北方人に於いては罪惡視され抑壓されんとすると共にアルプス人に於てはこれが寧ろ享樂されるに傾くのではないかと想像される。又ギリシャ思想とキリスト敎的思想との間に於いてもギリシャ人の主知主義のため感情の如きものはパッションと見做されたとしてもなほその調和的な人生觀のためにかゝるものもさほど罪惡視されなかつたに反し、キリスト敎的立場に於いては靈肉の對立と共にかゝる感情的な

ものの如きも肉的なものとして甚しく罪惡視せられるに到つたと考へられる。更に東洋に於いても支那に於いては感情の統制の如きことが說かれても、格別罪惡視されることもなく寧ろ中庸が尊ばれたに對し、印度に於いては一方煩惱卽菩提の深い思想にも導くと共になほ他方苦行のみを以つて解脫の道となす小乘の諸敎を生み出しもした、支那のものとは相當異る人生に對する態度が認められるのである。かゝる人生觀そのものの研究は心理學の問題であるよりも哲學の問題であり、倫理學の問題であつて、從つて感情の煩惱的性格の如きも現代の科學的心理學によつては顧慮され得なかつたのであるとも云へよう。併しかゝる社會を支配する人生觀が個人の思想にも反映して或ひは感情を享樂せしめ或ひは煩惱視せしめるに到ることをも考へなければならない。

然らば次に感情が煩惱視されることによつて如何なる事象が發展するであらうか。リボーが理性とパッションとの交涉を論じたのは對立する兩者ではなく相絡み合ふ兩者であつた。クレッチュメルも「神と惡魔」「善と惡」の如き對立の思想そのものをも人間の心の深みにある對立せる衝動性に基づくものと考へつゝ、衝動性と精神との交錯を性的衝動、暴力、苦痛を嗜好する衝動などについて解明してゐる。かくて氏は例へばシレルに於いては普通青年期に過渡的に見られるに過ぎない父親に對する反抗と權威に對する抗爭との態度が永く殘存して「群盜」から「ヴィルヘルム・テル」に到るまでの父殺し、暴君殺し、改革者的態度を生み、遂に精神的に倫理的に醇化されてシレルの自由理

想主義を燃え上らせる導火線ともなつたことに注意し、更にフィヒテの如きも內面に於いては權謀術數に富み、飽くなき支配慾にかられた人物であつて、その中にはロベスピエルたり得る素質が十分に具はつて居り、その哲學體系の如きもその衝動構造の理性的反映に外ならぬことを論じてゐるのである。その他多くの思想家、宗教家、藝術家、政治家などに於ける衝動性と精神性との交錯を指摘してゐるが、かゝる偉人に於いては異常とも見らるべきその衝動性が昇華卽ち醇化されるか、或ひはその程度が輕く他の偉大なる性格の中に隱されて了ふことが多いのである。併しその他面衝動的なものが理性的なものを虜にし理性の名に於いて感情的滿足が計られる場合も少くない。リボーが文化現象に關するパッションとして擧げたものなどの中には此の種のものも數多く見られるのである。他教徒に對する迫害、懺悔の狂ひなど殊に情緖性を伴ひ易い宗教的行動に於いてこれは特に多い。宗教家などに屢々認められる世間人以上の冷酷さなど、衝動に對する禁壓より生じた他の變態である。此のほかにも衝動に對する反動的態度が支配する場合がある。卽ち衝動の强きが故に禁慾に走り、人にも增して我儘なるが故に人にも增して謹嚴となり、無力なるが故に力への意志を說くが如き過補償の現象である。此の場合にも表面的な補償と內面的な衝動との間に葛藤が殘存し、種々の機會にその破綻を暴露することが少くない。

併しかゝる理性と衝動或ひは感情との交涉に於いて最も興味深きものは强迫觀念の構成である。

強迫觀念とは一見謂れなく觀念、衝動或ひは感情が強迫的に意識に上り、意志的な努力を以つてしては驅逐出來ぬ現象である。此の場合意志に反して意識に上るほか之を抑壓せんとすることによつてこれが益々執拗となり惡性となると云ふことに注目せねばならない。之に關する學說としては精神分析說のものと森田正馬博士のものとが興味多いものを持つてゐる。精神分析說[五]に於いてはこれはヒステリーと共に原本的な性的欲望と之に對する抑壓との妥協の產物であり、ヒステリーに於いては欲望の假裝せる實現の方が表面に出でるに對し強迫觀念の方は抑壓の契機が强いものであるとする。卽ち衝動的な欲望に對し自我は恐怖を感じその欲望の內容は抑壓により隱蔽されてもその感情が殘留し、これが原內容の假想されたものに附着すると見るのである。精神分析說の特色は更に强迫觀念の內容を非常に重視しそれが夫々深い意味をもつと考へる點である。例へばフロイドは十九歲になる娘の就寢儀禮についてそれが根本的には父親に對する無意識的な愛著に基き、更にその時計の恐怖、花瓶破壞の懸念等は性的な事柄に關した恐怖、懸念の轉移せるものなることを分析によつて示すのである。その治療の機構は分析による病源の自覺と共に醫師との交涉に於いて抵抗が破られ抑壓が開放せられることである。之に對し森田博士說[六]に於いては强迫觀念の內容の意味は全然顧慮せられず專らその場合の根本的態度が問題とされる。氏によれば强迫觀念は心氣症的氣質を地盤として發現し、精神交互作用によつて發展するものである。例へばある高等學校の生徒が鼻尖

についての强迫觀念を持つと云ふ場合、その鼻尖は偶然的な無意味のものであつて只それを苦にし更に氣にすまいとして二重に苦にするためにその强迫觀念が發展するのであると說かれる。その療法の根本はこの精神交互作用を破壞して單純な葛藤に歸することであつて先づ恐怖への直入、之に對する隨順が計られるのである。何れにしても强迫觀念は衝動的なものを抑制せんとする努力によつて却つてその理想より遠ざかるところに、森田博士などの言葉を借りれば赤面恐怖症の患者は赤面を恐るゝが故に益々赤くなり、不潔恐怖症の患者は不潔を恐るゝが故に愈々不潔となるが如き點に、强迫觀念の興味ある動態が存在するのである。換言すればかゝる衝動的なものを煩惱視することによつて却つて之に纏縛せられ益々これよりの解脫が困難となる點があるのである。

理論としては感情的衝動的なものはあくまでも統制せられねばならぬであらう。又理想はあくまでも高く揭げられ、完全はあくまでも追及せらるべきであらう。併し有限なる人間の實踐に於いては理想と現實とが對立せしめられる他面和解されなければならない。理想と現實との單なる乖離と相克、これが强迫觀念である。かゝる理想と現實との對立を重視する道德には强迫觀念への道がある。クレッチュメルも云つてゐる。「健全な衝動性を有する人は道德を目して恰もスープに於ける鹽の如きものであるとする。鹽はスープに必要であるがそれかと云つて餘りその味が勝ち過ぎてはならない。『道德は常に自明の理である。』ところが義務觀念の非常に强い人々ではさうではない。彼

等は陰鬱で冷靜な樣子をして居り、或ひは固陋でもの惱ましげに見える。丁度强迫觀念症の患者が何時も定つて呈する性格上の徵候と相似通つて來るのである。」此等の人々は道德の强調を自己の義務と考へそのためには自らあらゆる生活の享樂を犧牲にするのみならず、之と同じことを自分等の周圍にも求める。「彼等が自分自身にとり又自分の家族や周圍にとつて厄介千萬な代物とされることのあるのも要するにかゝる義務觀念によるのである」と。確かに道德上の嚴肅主義を一般人に强制するならばその中から多くの强迫觀念の患者を生み出すであらう。

此處に大乘の敎說の單に煩惱解脫のみでなく煩惱卽菩提を說く深い意味が——それは元來心理學的なものに盡きるものではないとしても——展開されて來る。先に述べた精神分析說の强迫觀念の療法も、森田博士の療法もいはゞ此の煩惱卽菩提觀を根柢にしてゐると見ることが出來る。精神分析說の汎性慾觀は人間一切の行動、一擧手一投足と雖も性慾を離れ得ないとなすものなるが故に、結局佛敎の悉有佛性觀と相卽するものとなり、一應何ものの捨離すべきものも抑壓すべきものも無いこととなるのである。森田博士說に於いてもそのまゝ、自然が尊ばれ一應理想主義が排棄されるのである。勿論これらの立場にも陷り易い弊もないわけではない。併しそれにも拘らず有限なる人間にとつてはそれが深い意味を持つことを否定することは出來ない。(七)

註(一) Bühler, Ch., Kindheit und Jugend. 3. Aufl. 1931.

（二）ビューレルの右の書による。(294 ff.)
（三）Kretschmer, E., Körperbau und Charakter. 5. und 6. Aufl. 1926.
（四）內村祐之譯「天才人」(昭和七年)による。
（五）Freud, S., Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse. 1933, 291 ff.
（六）森田正馬「神經衰弱及强迫觀念の根治法」大正十五年、九九。
（七）此處にまた道德に對する宗教の意味がある。宗教には煩惱を煩惱として之を斷ぜんとする一面もなければならぬ。併しその根本に於いて煩惱卽菩提の契機を含まねばならぬ。卽ち宗教には差別の根本に平等がなければならぬ。はからひよりもはからひを捨てることがなければならぬ。惡人でも往生すると云ふことがなければならぬ。宗教にはかくの如き道德とは場合によつては全く反對する、現實と理想との對立を超えるが如きものがなければならない。かゝるものを背後におき地盤となして始めて安んじてはからひをなし道德的精進をなし得るに到るのである。罪人も救はれ惡人も往生するといふ信念があつて始めてよく罪より離れ惡から脫し得るやうになるのである。道德的立場に於いては罪を犯さざらんと努力するために却つて罪を犯すに到るが如き場合があるが、宗教的立場に於いては罪は赦されるが故に却つて罪を犯さずに濟むやうになるのである。これは人間の二元性のため生ずる興味ある矛盾であつて心理學的に考へても宗教的立場は之を救ふものである。只心理學的に問題となることは人間の個性である。例へば回歸性氣質者と乖離性氣質者とに於いて之を導く場合理想を高調するか、和解を重視するかの重點を變へねばならぬこともあるのである。

以上を要するに感情の煩惱的性格の基礎となる事實としては感情の合目的性と盲目性の二重性、更に之を統制する一段高い心的作用が先づ豫想されるが、なほこれのみにては十分ではなく煩惱的性格の成立のためには此の統制する作用が反省作用にまで進まなければならない。此處に個人の個

性、發達段階の個性、更に人生觀の類型の如きものが問題となる。感情的なものと理性的なものとの交渉にも種々の樣式があるが、感情的なものを徒らに抑壓しようとし兩者の間に乖離を來すときは强迫觀念を發生する場合がある。卽ち理想に向つて努力するがために益々理想より遠ざかることとなるのである。而して之を救ふものが煩惱卽菩提的契機である。

四、結　論

然らば煩惱の概念は如何なる意味に於いて現代心理學に生かすべきであらうか。パッションの概念には受動狀態、感情一般、受動的感情、感情の根本惡性、持續的感情的態度などの意味が含蓄されてゐる。煩惱の意味にも身心を煩はし惱ますものとの現實の意味と惡性なるものとの必ずしも現實的なるを要しない意味とがある。併し受動狀態、更に受動的感情の意味はティチナーの二次的注意に對する一次的注意、之に應ずる情緒 emotion の概念規定などに之を見ることが出來る。持續的感情的態度の意味は英國のセンチメントに於いて別の之に相當する言葉を持つてゐる。必ずしも自覺を俟たない惡性の意味は寧ろ惡の概念によつて表現すべきであらう。かくて煩惱の言葉を生かさうとすれば主として「心を惱ますもの」の意味に限定するのが最も妥當と思はれる。かゝるものはそのまゝではパッション概念の中には無かつたと云ふことが出來る。併し我々は感情についてかゝる概念に相當すべき事態を明かに有するのである。

かゝる心を惱ますものは感情の一種類ではなく種々の感情の帶びる性格である。勿論ティチナーの意味の情操などは自己に對立するものでない以上煩惱的性格を持つことはないであらう。又單純な快・不快なども表面的であり一時的であつてこれが自己と對立して深刻な葛藤を生ずるが如きことは殆どなく、かくて特に煩惱的性格を持ち易いものは本能的なものと結合し生理的にも低い中樞を持つ怒り、恐れ、喜び、悲みなどの情緒であると云はねばならない。併しこれらのものも必ずしも心を煩はすものでない以上之と煩惱とを同視することは出來ない。かくて感情の特殊の種類としての煩惱ではなく感情の帶びる性格としての煩惱を考ふべきである。

更に心を惱ますものは强迫觀念の如き場合に於いては理想であり反省作用であつて衝動的なものに對するならば通常寧ろ理性と呼ばれるものである。場合によつては宗教、道德の如き理性的であるべきものが徒らに心を煩はし眞實の理想への精進を妨げるが如きことも存在する。かゝる場合に於いては所謂「理性」の煩惱的性格を說くことも出來るであらう。是の如き點よりしても煩惱は感情その他の精神作用の持つ一つの性格と見らるべきである。

併し心を惱ますものが凡て煩惱ではない。右の理想の如きものも單に發展の媒介をなす限り、一時的には心を惱ますとしても煩惱とは考へ難い。かくて單に心を惱ますのみでなく茲にはなほ合目的性の問題或ひは着の問題が含蓄されて來てゐることを否定することが出來ない。之と關係してか

ゝる煩惱的性格を考へるとき實踐的人間に於いては常に煩惱卽菩提的契機を含まねばならぬことが理解されるであらう。併しかゝるものは理性と衝動とが先づ嚴格に對立せしめられるのでなければ要請されない。更に單に理論的立場に立つときその間に生じ易い破綻は氣づかれ難い。かくて哲學體系などに於いてもこれが注意されないものの生ずるのも敢て無理ではないのである。茲にまた個性が問題になる。心理學的に云へば、煩惱を說き煩惱卽菩提を說くそのことが一つの個性、性格であると云ふことも出來るであらう。